

インターアクション能力の育成を 目指した聴解教材の作成に向けて

吉田 千春
田中真寿美
林 朝子

要 旨

聴解能力はインターアクションに不可欠であるが、従来の聴解教材の多くは聞いて内容を理解させることを主な目的としている。インターアクション能力の育成には、実際のインターアクションの特徴を反映させた活動を教材に組み込む必要がある。日常生活に必要な場面を取り上げることはもちろん、何のために聞くのか、そのためにどのような準備が必要なのか、聞いた後にどのような行動が求められるのかといった実際の行動を考え、それに即した総合的な練習が必要である。本稿ではこれまでの聴解指導、聴解教材、聴解活動の分類を概観し、実際のインターアクションに繋がる新しい聴解教材に必要な要素及び内容を考察する。

1. はじめに

「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」の4技能のうち、日常生活では「聞くこと」に使う時間が全体の50%以上を占めると言われている（国際交流基金2008）。「聞くこと」はインターアクションを行う上でも重要な役割を果たしているが、日本語教育においてインターアクション能力を考える際は「話すこと」を重視する傾向にある。しかし、学習者の中には相手の発話が理解できず、適切なインターアクションができないケースも多い。

ネウストプニー (1995) はインターアクション教育¹のために、学習したことを練習するだけではなく、実際の場面でインターアクションを行う「**実際使用のアクティビティー (活動)**」を教育課程に入れることを提唱している。

日常生活における「聞く」活動を考えると、「店のメニューについて店員に質問する前に、推測する」など、聞く前に準備をすることもある。また、聞いて理解するだけで終わらず、「店員の説明を聞き、食べ物を注文する・注文しない」などのように、聞いた後に適切な行動ができるかどうかが重要である。従って、適切なインターアクションができるようになるには、聞く前の行動から聞いた後の行動までを含めた総合的な練習を行い、**実際使用のアクティビティー**を含んだ聴解指導が必要となってくる。

また、ネウストプニー (1995) はインターアクション能力を育成するには、言語能力だけではなく、社会言語能力、社会文化能力の3つの要素を取り入れる必要があると述べている。特に、「聞く」活動においては、話の背景にある社会文化に関する知識が必要であり、双方向のやりとりを行うには、談話管理などの社会言語能力が必要である。言語的要素に加えて、社会言語的要素、社会文化的要素も併せて授業活動に取り入れることが大切である。

本稿では、このような観点からインターアクション能力の育成を目指した教材を作成するに当たって求められる教材の内容及び構成要素を考察する。

2. 先行研究

2.1 聴解指導について

聴解は第二言語学習において基本的な技能であるものの、学習者の聴解過程の解明が進まないことから (Vandergrift 2007)、何をどう聞かせるかなど「4技能の中で指導法の開発が最も遅れている」(横山 2008) と言われている。

¹ ネウストプニー (1995) はインターアクション教育には解釈アクティビティー、練習アクティビティー、実際使用アクティビティーの3つが必要であるとしている。アクティビティーの具体的な内容及びデザインに関しては神田外語大学 (2007) に詳しい。

インターアクション能力の育成を目指した聴解教材の作成に向けて

どう聞くか、つまり、聞く過程について、尹(2002)はボトムアップ処理、トップダウン処理、両者の並行処理といった情報処理過程のモデルを紹介した上で、トップダウン処理を可能にするスキーマの形成・活性化が聴解指導において有効であることを述べている。スキーマの活性化により、テキストの内容展開を予測しながら聞けるようになるため理解が容易になるとし、聴解力の向上にはスキーマの意識的な利用を促す指導が必要だと述べている。同じく聴解過程について、横山(2004)は学習者が用いるストラテジーについての先行研究を概観した。その中で効果的な聞き手は、モニターなどメタ認知ストラテジーを多用していること、意味処理の単位が一般的に大きいこと、複数のストラテジーを連鎖的に組み合わせて使っていること、既有知識、言語知識、文脈情報というリソースを巧みに使っていることを挙げている。また、これらを可能にするには、メタ認知ストラテジーによって自らの聴解を「計画」「モニター」「評価」することが重要だとしている。国際交流基金(2008)では、「聴解指導とは、『理解できない』ものを含んだテキストをストラテジーを用いながら理解する方法を練習させること」だとし、ストラテジー練習の方法を多く紹介している。

ストラテジー指導が聴解力の向上に貢献したと実証するのは難しく、効果を結論づけるのは難しい(尹2002、横山2004、2008)が、Miller(2003)によれば、ストラテジー研究により聴解練習が pre-listening、while-listening、post-listening という段階に分けられるとわかったとしている。国際交流基金(2008)では、授業の流れを①前作業：聞く前の準備をする、②本作業：テキストを数回にわたって聞いて理解する、③後作業：聞いた後に反応を表現したり、テキストから言語を学んだりする、の3段階に分けている。また、Underwood(1989)はESLにおけるこれら3段階の指導法について詳述している。

以上から、聴解ストラテジー研究の進展とともに聴解の結果(何が聞き取れたか)を問うだけでなく、聴解の過程(どう聞き取るか)を重視する指導

が提唱されていることがわかる。

2.2 聴解教材について

前述したように、聴解指導は、聴解の結果（何が聞き取れたか）だけではなく、聴解の過程（どう聞き取るか）までも指導すべきであるという考えが主流である。しかし、現在まで使用されている教材は聴解の結果に焦点を当てているものが多くを占める。以下では日本語能力をレベルに分け、情報処理の型も考慮に入れながら、聴解教材を概観していく。

初級の場合、音声を通しより確実に既習文型や語彙の定着を図るという目的もあり、既習の言語知識を使って音声によるインプットを理解するボトムアップ型が目立つ。タスクでは絵を使用したり、○×問題や穴埋め問題など工夫が見られる。しかし、文型・語彙共にかなり制限が加えられており、また、内容を確実に理解させるために、対話の長さ、発音、スピードなど音声の面からも、現実場面で行われている会話とは違いが大きい。そのため初級学習者にとって教室で学ぶ日本語と実際に聞こえてくる日本語との差が大きく、実際の日本語に対して「聞けない」という印象を持ってしまう場合もある。初級だからといって初めから制限された会話を聞かせるのではなく、指導の中で聞き返しなどの工夫を取り入れながら現実の会話を聞かせる教材も必要であろう。

初級後半からは、文型ではなく場面・トピックに即した機能面に重点をおいた教材も見られる。しかし、機能表現の意味や使用方法を聴解で学習し、それを会話の中で使用できるようになることを目標としているため、聴解の過程を重視しているとは言えないだろう。

中級から上級になると、トップダウン型の教科書が多く出されている。文型や語彙に大きく制限はなく、スピードの変化や騒音など自然な状態を音声に入れ込み、現実の会話に近いものを取り上げているものもある。トップダ

インターアクション能力の育成を目指した聴解教材の作成に向けて

ウン型の場合も、理解できないインプットを含むものを理解させるという聴解の結果に重点を置いているため、語彙や表現の理解と習得に留まったり、「音の変化」に注目させたり、「推測」「予測」などストラテジーに特化している。スキーマをプレタスクの段階で取り入れているものも見られるが、一部の課などに限定されている。

このように現在使用されている聴解教材はボトムアップ型かトップダウン型に大きく分けられる。しかし、実際の日常生活の聴解では、ボトムアップ型、トップダウン型のどちらかの聴解を行っているのではなく、2つの型を相互に使いながら理解を深めている（国際交流基金 2008）。早い段階から、ボトムアップ型とトップダウン型を相互に取り入れた教材による聴解指導が望ましいと言える。

また、インターアクション能力の育成には、「言語能力」「社会言語能力」「社会文化能力」を総合的に使用し、聴解結果だけではなく、聴解過程を重視した形の教材が必要であると言えるであろう。そのためには「聞かせ方」にも工夫が必要であると考えられる。例えば、2人以上が会話をしている内容を聞かせる場合には、学習者がそのうちの1人の人物として聴解活動中に「話す立場」「聞く立場」を体験する「役割聞き」等が有効的だと考えられる。

このように聞かせ方にも工夫を取り入れた聴解過程重視の教材を初級段階から取り入れていくことで、聴解能力がインターアクション能力へと結びつくことが可能になるであろう。

2.3 聴解活動について

聴解活動を実際のインターアクションの特徴から考えると大きく2種類に分けられる。1つはメッセージや情報を一方的に聞く「受動的活動」であり、もう1つはメッセージや情報の送り手と相互のやりとりの中で聞く「相互的活動」である。前者は受け手として聞くため自分が話し手となることはない

が、後者は「聞く」と「話す」を交互に行う点で前者との違いがある。それにより、聞く過程や聞いた後の行動などにも相違が生じてくる。

これらはCEFR（外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ参照枠）においても、「聞く受容的活動²」と「相互行為活動」に分けて分類されている。この「聞く受容的活動」の具体的例としては、「公共の放送（情報、指示、警報など）を聞くこと」、「メディア（ラジオ、テレビ、録音、映画）を聞くこと」、「聴衆の1人として生の演劇・集会・講演会・娯楽などを聞くこと」、「会話をそばで聞くこと」の4つが挙げられている。また、「相互行為活動」の具体的な例としては、「取引」、「打ち解けた会話」、「非公式の議論」、「公式の議論」、「ディベート」、「インタビュー」、「交渉」、「共同計画」、「目的達成のための実際的共同作業」の9つが挙げられている。

日常生活で実際に使える聴解能力を培うためには、「受容的活動」と「相互的活動」のどちらも体験することが大切であろう。教材を作成するに当たっては、この両活動に当てはまる聴解の場面及び機能を考え、聴解教材に取り入れる必要がある。

3. 教材案の要素と教材例

以上を考慮し、インターアクション能力の育成のため、実際のインターアクションの特徴を反映させた活動を組み込んだ初中級の教材案を考えた。まず、国際交流基金（2008）やMiller（2003）を参考に、教材に「はじめに」「前タスク」「本タスク」「後タスク」を設定した。あるインターアクションの一連の行動を「聴解活動」として取り入れることにより、聴解の結果だけでなく聴解の過程を重視し、また、より実際の場面に近い状態で聴解練習を行うためである。

「はじめに」は、社会文化的知識の確認をしたり、読む、聞く、話すなど

² CEFRでは「受容的活動」を「聞く」と「読む」の2つに分類している。

インターアクション能力の育成を目指した聴解教材の作成に向けて

でその課のトピックに関する既有知識を喚起させる部分である。続く「前タスク」では、本タスクの遂行を行いやすくするための前作業をし、意欲喚起をさせることを目標としている。「本タスク」は、その課で求められる聴解中の行動やその後連続して派生しうる行動（何のために聞くのか、聞いて何をするのか）を明示し、それを達成するための聴解活動となる。最後の「後タスク」は、教室内外で実際にインターアクションを行う場面を設定し、教材で取り上げられた内容を実際使用させるための促しの部分とした。モデル文を聞くだけに留まらず実際使用のアクティビティーを通して生の日本語を聞くことで、聴解能力に加え、インターアクション能力も向上すると考えられるためである。

次に、聞かせる聴解テキスト³は、2.3の分類に従い、「受容的活動」と「相互的活動」の2種類を考えた。課の初めには目標と場面を明記し、目標は、「聞く」(何を理解すればよいのか)と「できる」(何のために聞けばいいのか、聞いて何をすればよいのか)に分けて記した。以下に具体的な教材例を示す。

3.1 受容的活動

以下は受容的活動を聞く教材例である。目標は、「聞く」は留守番電話に残された伝言を聞いて理解すること、「できる」は聞いてメモを取ったり他の人に連絡したりすることに設定した。具体的な場面は、この聴解テキストを聞く学習者は大学でテニスサークルに入っている、そして、翌日他校と練習試合を行うことになっているという設定である。携帯電話という生活に身近なツールを用い、さらに他者へ連絡するためにメモを取るという現実的なタスクを考えた。

³ 国際交流基金（2008、p.12）に倣い、学習者が聞く日本語の音声を「テキスト」と呼ぶ。

3.1.1 はじめに

「はじめに」で留守番電話サービスからの着信メールの画面を示し、送り主と内容を確認する質問を設定した。この質問に答えることでメール内容を理解しているか確認できる。この段階では、伝言が入るとメールで知らせが届くことや「留守電」といった語彙の確認もあわせて行い、携帯電話の留守番電話メッセージを聞くというスキーマを活性化させることを狙っている。以下の教材例で下線が付いている部分は、本来空白となっており、学習者に書き入れてもらう部分である。

【はじめに】

あなたの携帯電話にこのようなメールが届きました。
これは、誰からの、どういうメールでしょうか。

20xx 年 9 月 5 日 20 : 39
From : 1414 (ソフトモバイル)
留守電のお知らせ
09/05 20 : 37
TEL: 0902992xxxx
留守番電話伝言あり 1416 (国内専用)

Q1: だれから? : ソフトモバイルから

Q2: 内容は? : 誰かがあなたに電話をした。 1416に電話をすると、
メッセージを聞くことができる。

3.1.2 前タスク

「前タスク」として留守番電話サービスセンターの案内を聞くことで、留

インタラクティブ能力の育成を目指した聴解教材の作成に向けて
留守電話を再生して聞くという作業につながる行動を疑似体験させている。

【前タスク】

あなたが気づかない間に、誰かがあなたに電話をかけたようです。
1416 に電話して、留守電話を保存する「留守電話サービスセンター」
の案内を聞いてみましょう。

Q: メッセージを聞きたい場合、何番を押せばいいですか。

_____ 1 _____ 番

案内メッセージは「パーソナルオプション」など理解しづらいと思われる語彙も含むが、必要な情報、ここでは「メッセージを聞く」ための番号だけを聞き取ればよいタスクとなっている。以下の文字化された案内メッセージはテキストに明示しないが、必要であれば、タスク実施後に学習者に示してもよいだろう。

【前タスク：音声スクリプト】

こちらは、ソフトモバイル留守電話サービスセンターです。新しいメッセージが1件、保存されたメッセージは1件です。メインメニューです。メッセージの再生は1を、パーソナルオプションの設定は2を、保存されたメッセージを削除する場合は7を、終了する場合はシャープを押してください。

3.1.3 本タスク

続く「本タスク」は、友人からのメッセージを聞いて他者へ伝言するため

にメモを書き情報を要約する（本タスク①）、さらに、聞き取った情報を他者へ連絡する（本タスク②）というものである。本タスクを始める前に、以下のような状況を示し、聞くための動機付けとする。

【本タスク①】

明日は、○×大学とテニスの練習試合があります。たぶん、メッセージは同じテニスサークルの佐藤くんかきょうよう子さんからだと思います。何か明日のことで問題があったのでしょうか。聞いてみましょう。

1. メッセージを聞いてメモを完成させましょう。

あす、練習試合の場所変更！

大学→市営コートへ

バス：市立病院行き、終点で降りる

2. もう一度聞いて、質問に答えましょう。

Q1. メッセージは誰からでしたか。

(佐藤くん ・ よう子さん ・ わからない)

Q2. このあと、あなたはどうしますか。

カンさんに電話して、明日、練習試合の場所が変わったと伝える。

そして、9時に郵便局の前に行けば、車で連れて行ってもらえると言う。

1のメモ書きは、下線の部分に聞き取った情報を書き入れることを課している。下線の数は学習者のレベルに合わせ増減させることが可能である。リスニング2の質問は、聞いたメッセージの内容を正しく理解しているか確認するためのものである。前タスク同様、以下の文字化された留守電メッセージは教材本文中に明示しないが、必要であれば、タスク実施後に学習者に示

インターアクション能力の育成を目指した聴解教材の作成に向けて
してもよいだろう。

【本タスク①：音声スクリプト】

あ、えーと、明日の練習試合の場所なんだけど、えーうちの大学から市営コートに変更になりました。時間は変わらずです。んで、その市営コートの場所わかる？ けっこう遠いんだよね。バスだと市立病院行きに乗って終点まで行かないといけないから、もしよかったらおれの車で一緒に行かない？ 山本さんと郵便局の前で9時に待ち合わせすることになってるから、乗って行くんだったら9時に来てください。それから、カンさんにもそう伝えてくれる？ よろしくー。じゃあ明日。

以下では、聞き取った情報を他者（友人のカンさん）へ伝えるというタスクを達成するために、まず、「考えてみよう」で電話をかける時の社会言語的知識を確認している。その後、カンさんの発話に反応するという練習を行う。

【考えてみよう】

1. 電話するとき、気をつけなければならないことの1つに時間があります。電話をしない方がよい時間は、何時だと思いますか。
2. 上で留守番電話のメッセージには、名前がありませんでした。電話するときは、自分の名前を言うべきです。そのほかに、電話するときや、メッセージを残すときに気をつけることは何でしょうか。

【本タスク②】

同じテニスサークルのカンさんに電話で連絡しましょう。何と言いますか。

〔電話の呼び出し音〕

カンさん：はい。

あなた：

カンさん：あ、こんにちは。どうしたの。

あなた：

カンさん：あそうなの。時間も変わったの。

あなた：

カンさん：あ、そうなんだ。でも私、その場所知らない。どうしよう。

あなた：

カンさん：やった。じゃあ明日、そこに行けばいいんだ。

あなた：

カンさん：じゃあ、明日9時にね。電話ありがとう。

あなた：

カンさん：はい、じゃね。

3.1.4 後タスク

インターアクション能力の育成を目指した本教材では、実際使用を教室活動の最後の段階に取り入れることが肝要と考え、「後タスク」において総合練習として実際使用を促すための状況を設定している。単に「実際に教室外で使ってみなさい」と突き放さず、学習者が自分の生活と関連付けられるような現実的かつ具体的な状況、例えば、欠席した授業で教師から発せられた指示に関するメッセージを留守番電話で聞き、メモ化しそれを友人に伝えなければならないという状況を挙げるのである。

以下の教材案（後タスク）では、留守番電話のメッセージまで提示した。

インターアクション能力の育成を目指した聴解教材の作成に向けて

学習者（教材案の「あなた」）は、メッセージを受け取り他の人（教材案の「Aさん」）に伝える。メッセージを受け取った「Aさん」は「あなた」となり、他の「Aさん」へ伝えていくといったやり方が考えられるだろう。練習やインターアクションの相手として日本人の参加が望めない場合はこの教材案を利用してよいし、日本人とのインターアクションが望める場合は、現実の状況を利用し、それに即したメッセージを留守番電話（あるいはレコーダーなど）に実際に日本人に吹き込んでもらうなどが考えられるだろう。言うまでもなく、ここは日本語使用環境や学習者の達成度などにより、内容や難易度の教師によるアレンジが可能な部分である。

【後タスク】

今日、あなたと友だちのAさんはかぜで授業を休みました。友だちの山田さんから、携帯電話に次のようなメッセージが入っていました。

「あ、山田です。かぜ大丈夫？今日、授業で先生が、来週、教科書の109ページから118ページまでの内容で小テストをやるって言ってたよ。授業で使ったプリントも見直しておくように、だって。それから、テストの後、119ページの問題をやるから予習しておけて。Aさんにも伝えておいてね。じゃあ、お大事にね。」

1. Aさんの携帯電話に電話して教えてあげましょう。
2. 伝える内容を簡単にメモに書きましょう。
3. Aさんは電話に出ませんが、留守番電話にメッセージを残しましょう。

3.2 相互的活動

ここでは「相互的活動」を聞く教材例を取り上げる。常に「聞く立場」あるいは「話す立場」として会話の参加者になることを前提とした聞く練習である。

以下の教材では、焼肉パーティをするための約束の場面を取り上げ、目標は、「聞く」ではパーティを実施するための予定決定や準備等を確認しながら約束できること、「できる」では実際に友達同士でパーティが実施できることと設定した。

3.2.1 はじめに

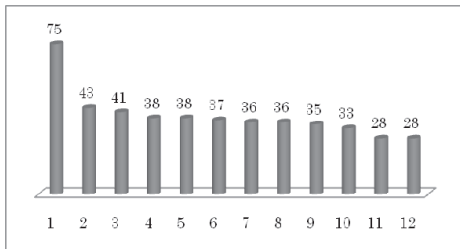
「はじめに」で社会文化的要素を取り入れることにし、学習者の母国との比較も通し、日本の余暇の過ごし方の傾向について知ることができるようにした。余暇の過ごし方として「テレビ」「ごろ寝」などのように個人で完結が可能な活動も挙げられているが、「おいしいものを食べる」「友人・知人とつきあう」などのように、次のタスク以降で何らかの「約束」場面につながるよう考慮した。

【はじめに】

1. 週末に時間があったら何をしようと思いますか。

2. 次のグラフは日本人の余暇の過ごし方を表しています。

_____に何が入るか考えてみましょう。(NHK放送文化研究所世論調査部『日本人の好きなもの－データで読む嗜好と価値観－』参照)



1. テレビ
2. ごろ寝
3. おいしいものを食べる
4. DVD・ビデオ
5. 新聞を読む
6. ショッピング
7. 本を読む
8. 友人・知人とつきあう
9. 雑誌を読む
10. 旅行
11. ドライブ
12. 家族とのだんらん

3. あなたの国ではどのように余暇を過ごしますか。

2. と比べてみましょう。

3. 2. 2 前タスク

次に、「前タスク」では、何かを一緒に行うためには必須である「日時を決める」活動を取り上げた。学習者にとって、何らかの日程を決める場面に遭遇することは多く、現実的なタスクといえる。自身の予定を直接的・間接的に伝えると同時に、相手の直接的・間接的な予定表示を把握し、双方の合う日時を一致させていく会話である。伝えたいことをどう伝え、聞きたいことをどう聞き出すかをテキストの中で確認することも可能である。A、B

それぞれの立場になって聞く「役割聞き」の活動を取り入れ、聴解を従来型の客観的な「聞き」に留まらないよう配慮した。さらに、学習者がペアになり、お互いの予定を確認し合うタスクを取り入れ、聴解内容理解から実践へのつながりをもたした。

【前タスク】

1 週間の予定を聞いてみましょう。

1. 田中さんとイーさんの予定を聞いて、表に書いてください。2人はいつ一緒に食事に行きますか。1回目は田中さんの予定、2回目はイーさんの予定を聞いてみましょう。(既に解答を記入したものである)

	4/28 月	4/29 火	4/30 水	5/1 木	5/2 金	5/3 土	5/4 日
田中さん	?	11時半まで 英会話	バイト	?	バイト	○	○
	バイト	○	バイト	○	バイト	○	○
イーさん	×	○	○	×	九州	九州	九州
	○	3時から バイト	○	×			

2. まず、あなたの予定を書いてください。次に、友達とペアになって、友達の予定を聞いて、書いてください。

	/ 月	/ 火	/ 水	/ 木	/ 金	/ 土	/ 日
あなた							
○○さん							

【前タスク：音声スクリプト】

田中：イーさん、来週からゴールデンウィークだから、おいしいもの食べに行かない？

イー：あ、いいですね。

田中：イーさんの予定はどう？私は土日は空いてるんだけど。

イー：5月3日・4日ですか？

田中：うん。

イー：すみません、2日から4日まで九州旅行なんです。

田中：そうかあ、九州行くんだ～いいね。

イー：田中さん、水曜日はどうですか。

田中：水曜は一日バイト、金曜日も。

うーん、火曜か木曜の午後はどう？木曜は旅行の前日で忙しいかな。

イー：そうですねえ、月曜の午後は何も予定ないんですけど。

田中：月曜午後もバイトなんだあ。

イー：火曜日は3時までなら大丈夫です。3時からバイトなので。

田中：イーさんも忙しいねえ。

じゃあ、29日火曜のお昼ご飯にしようか。

イー：はい。何時ぐらいですか。

田中：11時半まで英会話があるから、12時に駅前はどう？

イー：はい、わかりました。楽しみにしています。

3.2.3 本タスク

「本タスク」は、焼き肉パーティを実施するために必要な役割分担をしながら約束をする会話を取り上げた。登場人物は3名で、「前タスク」よりも長く、複雑な談話構成となっている。「本タスク」でも「前タスク」同様に、役割聞きを取り入れ、実際に会話に参加している疑似体験を通して、「確認

する」「示唆する」などのストラテジー理解も含めた聞きが可能である。

3人の会話内容を聞いて、パーティ実施の日、パーティ準備のために誰が何をすべきかを正しく理解しているかを問う内容理解（本タスク①）と、実際にパーティを実施するための約束をする練習（本タスク②）を設定した。

【本タスク①】

男性1人（中村くん）と女性2人（鈴木さんと山田さん）が焼き肉パーティをする約束をしています。聞いてみましょう。

1. 3人の会話を聞いて、内容を理解しましょう。_____に書きましょう。

Q.1. どうして焼き肉パーティをしようと思ったのですか。

テストが終わった打ち上げのため

Q.2. 鈴木さんはどうして土曜日がいいと思うのですか。

日曜日だと翌日は月曜日なのでゆっくりできないから

Q.3. 何曜日の何時に焼き肉パーティをすることになりましたか。なぜですか。

日曜日7時、山田さんが土曜日はサークル、日曜日は7時までアルバイトがあるから

Q.4: パーティには何人参加する予定ですか。

5人

Q.5: 支払いはどうしますか。

割り勘

2. 中村くんになったつもりで聞いてみましょう。中村くんは焼き肉パーティのときに何を持って行かなければなりませんか。

牛肉・豚肉・ワイン・玉ねぎ

3. 中村さんと鈴木さんは、誰にどんな伝言をしますか。

中村くん：エレンさんにアイスクリームなどデザートを持って焼き肉パーティに来てと伝えます。

鈴木さん：イーさんにキムチを持って焼き肉パーティに来てと伝えます。

本タスク①は内容確認が中心の問題である。1. では、「打ち上げ」「割り勘」などという聞き慣れない表現も出ているが、言い換え部分があり言葉の意味理解に役立てることも目指している。Q2などはスキーマを活用し、「日曜だと次の日辛い」のは何故なのかを推測させる狙いがある。2. では役割聞き徹底、3. では会話内容をさらに他者へ伝えるということを目的としたタスクを取り入れている。

【本タスク①：音声スクリプト】

鈴木：ねえ、来週、週末時間ある？

中村：え、何？特に予定ないけど。

山田：何かあるの。

鈴木：皆でパーティしないかなあと思って。どう？

中村：どこか行って？

鈴木：ううん、私のアパートで、焼き肉パーティどうかなと思ってさ。

テスト終わったし、打ち上げ、打ち上げ。

山田：それ、いいね。嫌なテストが終わったんだから楽しいことしようよ。

やろう、やろう。

鈴木：日曜日だと次の日辛いから、土曜日がいいかなと思うんだけど。

中村：そうだね、俺は土曜いいよ。山田さんは？

山田：あ、夕方までサークルあるんだ。

鈴木：じゃあ、日曜にしようか。

中村：いいよ～。

山田：あ、時間は7時以降でお願い。

鈴木：え～日曜も予定あるの？

山田：うん、バイトなの。

鈴木：仕方ないなあ。じゃあ、7時、時間厳守で集合してね。

皆で持ち寄りだから、食べたいもの持ってきてよ。

中村：焼き肉だから、肉はあったほうがいいよね。

山田：もちろん～。

中村：じゃ、俺が買ってくよ。牛肉ね。

山田：豚肉もお願い。

中村：了解～。

鈴木：飲み物は用意しとくね。お茶とビールでいいかな。

中村：ワインも持ってくよ。フランス人のエレンさんにもらったんだ。

山田：ねえ、エレンさんとイーさんも誘わない？

鈴木：いいかも。イーさん、日曜日は予定何もないと思うから、来られると思うよ。連絡しておく。エレンさんは、中村くんお願いね。

山田：イーさんにはおいしいキムチ持って来てって言っといて。

中村：山田さんは何持って来てくれる？

山田：あんまり重いものはちょっと困るかも・・・

バイト終わって直接行こうと思うし。

鈴木：もう～。じゃあ、しいたけとかピーマンとか野菜を何種類か買ってきてよ。

山田：うん、わかった。

中村：玉ねぎもお願い。

山田：ちょっと重い～。

インターアクション能力の育成を目指した聴解教材の作成に向けて

中村：じゃあ、俺が用意しとくよ。エレンさんには何を頼む？

鈴木：じゃあ、デザート何か頼んでおいて。

中村：アイスクリームとかでいいよね。

鈴木：うん。

中村：お金はどうする？割り勘だよな。

山田：うん、そうしよう。

中村：じゃあ、清算はパーティのときにね。

【本タスク②】

友だちの誕生日パーティをしたいと思います。準備することなど約束してください。

誰の誕生日	
いつ	
どこで	
プレゼント	
パーティ準備	

本タスク②では、実際に約束をするタスクを設定した。本タスク①の会話で聞き取った談話パターンや内容を確認しながら会話を進め、お互いの約束内容を確実に決めていくことが可能となることを目指している。

3.2.4 後タスク

本教材はインターアクション能力を伸ばすために、実際に学習者が「約束」をした後に何ができるかを重要視していることから、後タスクでは学習者が約束をし、何かを準備をしなければ実行に移せない活動を取り入れる。例えば、パーティや旅行の実施・フリーマーケットへの参加・グループ発表を行

うなどという後タスクが設定できるであろう。「約束」の形式的な練習だけに終わらず、次の活動につながるタスクを取り入れることが望ましい。

4. まとめと今後の課題

以上、新しい教材作成に当たり基本となる考え方及び具体的な活動内容を詳述した。

日常生活に必要なインターアクション能力を育成するためには、日本語の実際使用に繋がる学習のプロセスを考え、学習者の生活場面を中心に実際の行動に即した練習を行い、それを実際のインターアクションの中で使用することが大切である。今回作成しようとする教材は、この考えを基に、実際の場面に臨む前の練習、つまりリハーサル的な役割を果たす教材の作成を目指している。

今後は、必要な場面、機能、タスクなどを整理し、日本語の授業で使用するによりフィードバックを得て、教材としてさらに改善していきたいと考えている。

【参考文献】

- 尹松 (2002) 「第二言語・外国語教育における聴解指導法研究の動向」『第二言語習得・教育の研究最前線－あすの日本語教育への道しるべー』日本語言語文化学会 279-288
- 神田外語大学留学生別科 (2007) 「神田外語大学共同研究プロジェクト アクティビティーから考える日本語クラスのデザインと実施 研究成果報告書」神田外語大学
- 国際交流基金 (2008) 『聞くことを教える (国際交流基金日本語教授法シリーズ 5)』ひつじ書房
- ネウストプニー, J. V. (1995) 『新しい日本語教育のために』大修館書店

インターアクション能力の育成を目指した聴解教材の作成に向けて

- 横山紀子 (2004) 「第2言語における聴解ストラテジー研究－概観と今後の展望－」『第二言語習得・教育の研究最前線－2004年版－』日本言語文化学会 凡人社 184-201
- 横山紀子 (2008) 『非母語話者日本語教師再教育における聴解指導に関する実証的研究』ひつじ書房
- 吉田茂、大橋理枝 (他) [訳・編] 『外国語教育Ⅱ－外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠－』朝日出版社
- Miller, L. (2003) *Developing listening skills with authentic materials*.
<http://www.elthillside.com/up/files/article4.doc>. 2010年9月27日閲覧
- Vandergrift, L. (2007) Recent developments in second and foreign language listening comprehension research. *Language Teaching*. 40. 191-210.
- Underwood, M. (1989) *Teaching listening*. London: Longman.

【参考教材】

- 浅野陽子 (2009) 『LIVE from TOKYO』The Japan Times
- 川口さち子他 (2003) 『上級の力をつける聴解ストラテジー上』凡人社
- 川口さち子他 (2003) 『上級の力をつける聴解ストラテジー下』凡人社
- 永田由利子 (2009) 『Voices From Japan』くろしお出版
- 日本語教育研究所 (2002) 『初級から中級への橋渡しシリーズ③聴解が弱いあなたへ』凡人社
- 文化外国語専門学校 (1992) 『楽しく聞こうⅠ』凡人社
- 文化外国語専門学校 (1992) 『楽しく聞こうⅡ』凡人社
- ボイクマン総子他 (2004) 『聞いて覚える話し方 日本語生中継 中～上級編』くろしお出版
- ボイクマン総子他 (2006) 『聞いて覚える話し方 日本語生中継 初中級編Ⅰ』くろしお出版

ボイクマン総子他(2006)『聞いて覚える話し方 日本語生中継 初中級編2』
くろしお出版

牧野昭子他(2003)『みんなの日本語初級Ⅰ 聴解タスク25』スリーエネットワーク

牧野昭子他(2005)『みんなの日本語初級Ⅱ 聴解タスク25』スリーエネットワーク

宮城幸枝他(1998／新装版2010)『新装版初級日本語聴解練習 毎日の聞き
とり50日 上』凡人社

宮城幸枝他(1998／新装版2010)『新装版初級日本語聴解練習 毎日の聞き
とり50日 下』凡人社

宮城幸枝他(2007)『中級日本語音声教材 新毎日の聞きとり50日上』凡人社

宮城幸枝他(2008)『中級日本語音声教材 新毎日の聞きとり50日下』凡人社